



# 武汉大学留学報告書

福島県立医科大学医学部 4 年  
学籍番号 m161064 氏名 鹿野 光治

## 1.はじめに

私たちは4月3日から5月17日の1か月半の間、交換留学生として武漢大学に留学させていただきました。この留学を通じて私は海外への見聞を広め、多くの人々と交流し、貴重な経験を積むことができました。このレポートではその体験を記録していきたいと思います。

### 1-1 留学の概要

留学期間 4月3日～5月17日  
配属先 病理学講座  
同伴者 鍋田 郎冊 五十嵐 盛滉  
留学の目的 福島県立医科大学と武漢大学医学部は平成8年から交流を始め、平成21年から交換留学生を派遣するなど密接な交流が続いています。私も交換留学生として中国の医学、文化の理解を高め、交流を深めることに努めました。

### 1-2 武漢市の概要

武漢市は中華人民共和国中部、湖北省東部に位置する人口約1200万人を数えるメガシティです。長江とその支流である漢江の合流点に位置する武昌、漢陽、漢口の3区からなりあわせて武漢三鎮と呼ばれます。武漢の歴史は古く、楚(紀元前11世紀-前223年)の文化発祥地の一つであり博物館や資料館でその文化を垣間見ることができます。近代では孫文らによる辛亥革命(1911年)の発火点となった武昌蜂起の場所として有名です。

武漢市の中心部に流れる長江沿いには高層ビルが林立し、長江に架かる橋から望む夜景はメトロポリスさながらの絶景です。また、多くの場所で高層ビルの建設工事が行われていて武漢のさらなる発展の兆しが感じられました。

武漢市には公共施設がたくさんあり、音楽ホールや博物館、美術館などがあります。どの公共施設もその莫大な人口を収容するためかビックスケールで、近年の中国の急速な経済発展で建てられた建物が多いからか比較的新しくとても綺麗な場所でした。

武漢市は中国中部における最大の都市であり、周囲の都市を含む長江中流域都市群を形成し、武漢市は「東洋のシカゴ」とも呼ばれています。



Figure 1 武漢の位置



Figure 2 長江から望む夜景

## 2.武漢大学について

### 2-1 武漢大学の歴史

武漢大学(武汉大学)は1893年に創立された大学であり、中国の大学の中では最も長い歴史を有し、約6万人の学生を抱える巨大な国立総合大学です。武漢大学は元々4つの大学から成り立っており、武漢水利電力大学、武漢測絵技術大学、湖北医科大学が2000年に統合されたことで現在の武漢大学となりました。大学内には昔から変わらない姿を残す古い建物や近年建てられた現代的な建造物などが混在し、池や桜など景色も綺麗なキャンパスとなっています。



Figure 3 武漢大学の門

## 2-2 武漢大学医学部について

私たちがお世話になった武漢大学医学部のキャンパスは中南病院(中南医院)の隣に位置し、武漢大学のメインキャンパスとは少し離れた東湖(东湖)の対岸にある。中南病院は武漢大学の大学病院であり、実際に何度か見学に行かせていただきました。

中国の大学の医学部は5年制であり、4年間で基礎と臨床を座学で学び1年の臨床研修を経て卒業します。そして、たいていの中国の学生は大学院に進学し3年間研究に勤しみ医師として医療機関に就職するようです。日本では6年制の医学部を出てから大学院に行く人は数少ないので驚きました。私たちが現地でお世話になった学生は5年生と大学院生の方々でした。中国では6月が卒業シーズンだそうで、その1か月前で卒業するための論文や試験で忙しい中、私たちが歓迎して戴いて深く感謝しています。武漢大学の医学部は中国人が進学する本科と留学生が進学する国際科の二つの学科があり、本科は約100人、国際科は約70人いて留学生は半分以上がインド人でその他にサウジアラビアやバングラデシュなどアジア人がほとんどでした。私たちは主に国際科の学生向けの授業に参加し、英語で授業を受けました。



Figure 4 武漢大学医学部の正門

## 3. 中国での留学生活

### 3-1 寮生活

私たちは武漢大学の医学部キャンパスにある寮に泊まることができました。寮は一人部屋であり、留学前に用意してあるか不安であった洋式トイレやシャワー、エアコンも完備されていました。電気も停電などに見舞われることなく夜間も深夜まで明かりをつけていても大丈夫でした。医学部キャンパス内でも授業を行う建物に程近い場所に寮があったので、授業に行くために早起きをするといったストレスを抱えずに留学生活を送ることができました。寮ではwifiも一応使えるが速度は遅く、中国の規制によってGoogleなどの中国国外のサイトも開けないためあまり使用しませんでした。

洗濯は寮内にある一回3元の洗濯機を使っていました。この洗濯機を使用するためには1元硬貨が必要であり、自然と1元硬貨を貯める癖がついてしまいました。中国では1元は硬貨と紙幣、2種類あり、使用頻度は1元紙幣の方が多く、なかなか1元硬貨を入手できなかったこともその理由の一つです。また、部屋には洗濯物を干す場所はないので、私は突っ張り棒とハンガーを日本から持ってきて使用していました。さらに基本的に部屋干ししかできなかったのがこの点は改善してほしいと思います。

### 3-2 食生活

留学中、私は中国の人と一緒にご飯を食べたり、私たちが料理店、食堂を探したりして食事を満喫しました。私は自分で中華料理を作るのが好きで、中華料理通を自負していましたが本場の中華料理は私の想像を超えて多彩で、どれも美味しかったです。

日常生活で安く食事を済ませたいと思った時、私たちはキャンパス内にある食堂やコンビニで食事を摂りました。コンビニではパンや熱干面(米の麺を使ったまぜそば)、拌面(米の麺を使った牛挽肉ベースのまぜそば)、牛肉面(米の麺を使った牛肉入りラーメン)などを食べていました。食堂では回鍋肉(ホイコーロー)、麻婆豆腐といった日本でも馴染みのある料理を始め、西红柿炒鸡蛋(トマトと卵の炒め物)、青椒肉丝(ピーマンと牛肉の炒め物)、鱼香茄子(マーボーナス)といったあまり聞かない料理も取り揃えており、それらはすべて10元以下で食べることができました。しかし、食堂で食事を摂るには大学の学生証が必要であり、私たちは学生証をもらうことができず先生から学生証をお借りして食堂を使用していました。つまり、短期留学では食堂が使用できないのでこれから留学に行く人は先生にカードを貸してもらおうなどと良いと思います。

毎日中華料理を食べているとさすがに飽きてしまいます。そんな時には、日本料理を食べに行きました。大学の近くにある漢街(漢街)という場所には日本料理や韓国料理などアジアの飲食店がそろっています。漢街はショッピングモールのような場所で価格は割高ですが、飲食店も海外のブティックなど多くのお店があり、休日には多くの人々が賑わっていました。武漢に来たら漢街に行ってみると良いでしょう。



Figure 5 食堂での食事

### 3-3 日常生活

武漢の交通はとても便利です。交通は地下鉄が縦横無尽に駆け巡り、バスが5分おきには巡回しており公共交通機関が充実しています。公共交通機関を使用するときは「武汉通」という日本でいう「suica」のようなカードがあるのでそれにお金をチャージして使用すると非常に移動に便利です。私は地下鉄やバスを使って様々な場所へ観光や食事へ行くことができました。

普段の生活は日本にいた時よりも充実していました。平日は授業に参加し、休日は中国の人達と食事に行ったり、観光に行ったりしました。余暇の時間は読書と語学の勉強の時間に費やしていました。中国では大学から一步外に出ると、日本でもそうかもしれませんが英語でのコミュニケーションが難しかったです。そのため私は中国語の勉強をするために中国古典の本や授業で使った中国語の教科書を読んだりしました。中国語は読み方は漢文を読む要領で読むことができたが、発音がなかなか難しかったです。中国語はピンインという読み方で発音しますが、この発音は4声という抑揚で同じ音を変化させなければならないのです。この発音が難しく、日本語は基本的に抑揚で意味が変わらない言語であるので日本人である私にはなかなか覚えることができなかつたです。しかし、ネイティ



Figure 6 中国で買った本

ブの中国人との会話を通じて少しずつであるが短い会話が可能となり、中国の日常生活に彩りが増えたように感じました。

## 4. 武漢大学での学生生活

### 4-1 配属講座

私は武漢大学医学部の病理学講座に配属されました。そして、病理学講座の樊先生が私の担当の先生として様々な指導をしていただきました。私は病理学講座のカンファレンスや病理診断に何度か参加させてもらいました。カンファレンスは平日午前8時に毎日行われ、担当の先生が自分の患者の治療方針について話していました。病理診断では顕微鏡を先生と一緒に見ながら診断のディスカッションを行いました。



Figure 7 病理の授業

### 4-2 授業

私は国際科の授業に留学生とともに参加しました。私たちの配属講座を中心に参加し解剖学、病理学、免疫学の授業を受講しました。授業は英語で行われ、講義を通して難解な医療英単語の理解に努めました。また、国際科の留学生が私たちを講義に温かく迎えてくれて解剖の授業などでは一緒に解剖を行いました。医療系の講座と共に中国語の講座も受講しました。中国語の授業も医療中国語と日常中国語の二つを受講し、中国語で日常会話ができるように勉強に励みました。



Figure 8 中国語の授業

## 5. 文化交流

### 5-1 国際交流

今回の留学では様々な中国人の方々と交流することができました。冷さんと高さんは私たちのお世話係として様々な場面で力になってくれました。冷さんは私たちに中国語を教えてくれて、日本人の友人を紹介してくれました。高さんは日本語を話せて、同じく日本語を話せる中国人の友人を紹介してくれました。また、昨年に日本に留学に来た中国人の方々も私たちが歓迎してくれて、食事や遊びに武漢を案内してくれました。同じ講義を受けていたインド人の留学生も私たちが食事に誘ってくれて歓待してくれました。中国で出会った李先生は中国語の先生で私たちがコンサートや食事に何度も連れて行っていただきました。李先生には中国語も教えていただき本当にお世話になりました。私たちの配属講座の先生にも食事などに誘っていただき



Figure 9 李先生

ました。



Figure 11 日本文化知識競賽



Figure 10 去年の交換留学生

## 5-2 日本文化知識競賽への参加

私たちは高さん達と日本文化知識競賽という日本の文化に関するクイズ大会に参加しました。このクイズ大会では、日本のサブカルチャーや文学、地理など日本人でも分からない問題が出題され、私たちも頭を抱えながら問題を解きました。そして、私たちは予選会を勝ち抜き決勝戦に進む予定であったが延期され先に帰国する日を迎えてしまいました。後日、私たち抜きで参加した高さん達は優勝と3位を独占したと連絡がありました。高さん達の日本への造詣は私よりも深いかもしれません。

## 6. さいごに

私はこの留学で初めて日本語が通じない世界を訪れることができました。しかも英語も大学を出ればなかなか通じません。中国語という未知の言語が私の周りで話されている感覚はとても新鮮でした。私が一番その感覚を感じたのは満員電車で、日本だと周りの喧騒の内容が耳に付いていましたのだが、中国だと日本よりもそれが大きいのですが内容がわからない分あまり耳に入って来ませんでした。言葉は聞き手が理解しないと通用しないということを改めて理解しました。新たな言語を習得することも新鮮でした。日本語ができていれば同じ漢字を使用している中国語は簡単だろうと考えていたが違いました。読むことは容易いですが発音が鬼門です。なかなかネイティブな中国人には発音が通じません。しかし、こうした事実も中国に来なければ分からなかったと思うので留学してよかったと思います。

また、留学を通じて現在の中国の実態を見ることができたと思います。中国で感じた問題としては、医療問題が挙げられます。中国の病院ではその人口の多さ故、病室数が足りなくて廊下にもベッドが何床も敷き詰められており、医師数も不足しているということです。これは都会である武漢の中核病院である中南病院の状況であり、日本のように地方の医師不足とは事情が異なりより深刻であると感じました。そして、日本人に知ってほしいのは私たちが想像しているよりも中国人は友好的だということです。国境問題や歴史問題など国家間の問題を数多く抱えているため中国人は私たちに対して敵対的であると思っている日本人は多いと思いますが、私には中国人は私たちに対しても親切に接してくれて、言葉の壁があるとしても私たちへの気遣いを感じることができました。私の周りだけがそうだったのかもしれませんが、私の中国への印象は留学に来る前とは180度転換しました。この留学でお世話になった中国の友人達に感謝するとともに彼らとの縁を絶やさないようにしたいと思います。

## 7. 謝辞

この留学に際してお世話になりました武漢大学の先生方、学生の方々、事務員の方々、現地の皆様、福島県立医科大学の企画財務課の國分さん、交換留学責任者の和栗教授、留学を応援してくれた家族や友人にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。